



青龍窟洞口ホール



鬼の唐手岩

青龍窟

ハンドブック
Seiryu-kutsu (cave) Handbook



青龍窟洞口ホール

青龍窟ハンドブック
Seiryu-kutsu (cave) Handbook
2018.6.30 Kanda Town Board of Education, Japan

発行日 平成30年6月30日
編集・発行 苅田町教育委員会
〒800-0392 福岡県京都郡苅田町富久町 1-19-1
TEL : 093-434-2212 FAX : 093-434-5543

青龍窟ハンドブックについて

青龍窟は、福岡県京都郡^{みやこ}苅田町^{かんだ}大字山口字青龍3261-1にあり、カルスト台地平尾台の東側に位置します。北九州国定公園の第一種特別地域で、国の天然記念物に指定されています。

苅田町では、青龍窟を文化財保護や郷土愛の醸成に資するための貴重な学習教材や観光資本として捉え、小中学生の体験学習や観光ガイドによる利用を促進しています。近年の年間利用者数は約500人を越えており、利用者の安全確保と洞内の環境保全が急務となっています。そのため、苅田町教育委員会は定期的に消防本部と救助訓練や入洞者の目的・人数・入洞範囲などの把握に努めています。

また平成28年度には、苅田町と日本洞窟学会が共催し、日本洞窟学会第42回大会（苅田町平尾台大会）がおこなわれました。この学術的・教育的な大会の開催により、全国からの洞窟研究者・洞窟探検家が集まり交流の場となったことや、町民が洞窟とカルストについて親しみ、郷土の自然・文化・歴史的資産への理解を深めるよい機会となりました。この大会を契機として、日本洞窟学会を中心とした方々の協力を得て、青龍窟における環境保全と安全な利用のための本解説書を作成することができました。

本書が、文化財保護に対する理解を深める一助となり、さらには町民の皆様を始め多くの方々に利用され、特色ある郷土の自然・歴史学習に活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行に際し、ご理解とご協力をいただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成30年6月30日

苅田町教育委員会
教育長 森田 耕治

1	青龍窟の概要	1
2	青龍窟のなりたち	3
3	青龍窟の地質・地形	5
4	青龍窟周辺の自然環境	7
5	青龍窟の鍾乳石	9
6	青龍窟の化石	11
7	青龍窟のコウモリ	13
8	青龍窟の歴史	15
9	青龍窟における苅田町の取り組み	17
10	青龍窟の保護と利用	19
11	青龍窟洞口ホール	23
12	青龍窟へのアクセス	25



青龍窟洞口ホール

1. 青龍窟の概要

浦田健作

平尾台にある200ほどの洞窟の中でも、青龍窟は長さ1785m以上、高度差65mで最も大きな洞窟の一つです。平尾台の東斜面に位置しており、大きく洞口ホールと地下川の二つの部分に分けられます。

洞口ホールには、かつての山岳修験道等覚寺の行場や奥の院があったとされており、現在も国指定重要無形民俗文化財「等覚寺の松会」の行事がおこなわれています。国指定天然記念物の範囲は窟神社の境内地になります。地下川洞窟は立体的な迷路のような非常に複雑なかたちのため、まだ全体の広がりはよくわかっていません。洞窟の奥からはトウヨウゾウ・ナウマンゾウなどの絶滅した動物の化石がみつかっています。

青龍窟は地質学・地形学・洞窟学・古生物学・考古学・民俗学などさまざまな分野で日本の洞窟の中でも重要な洞窟であり、1962年に国の天然記念物、1972年に北九州国定公園の第一種特別地域に指定されています。国の文化財と国定公園の両方に指定された鍾乳洞は、山口県秋吉台の秋芳洞・大正洞・景清洞・中尾洞と平尾台の千仏鍾乳洞・青龍窟の6つだけです。



菟田町遠景航空写真 (2015年6月撮影)



青龍窟周辺を南側上空より望む(九州歴史資料館所蔵 2018年3月撮影)

青龍窟関連年表

現在 ↑	時代区分	主なできごと	
新生代	第四紀	現代	2016年：日本洞窟学会第42回大会が菟田町で開催 2000年：日本洞窟学会第26回大会が菟田町で開催 1999年：広谷湿原が町天然記念物に指定 1993-95年：等覚寺修験道遺跡群の調査がおこなわれる 1976年：浦田健作らがナウマン支洞とナウマンゾウ化石を発見 1975年：山田博明らが田代の岩屋から青龍窟に通じ抜け、白龍窟を発見 1972年：青龍窟周辺が北九州国定公園第一種特別地域に指定 1962年：青龍窟が国天然記念物に指定 1961年：福岡県立小倉高校科学部が青龍窟地下川(本洞部)の測図を作成 1956年頃：青龍窟の一部が観光洞として公開されていた 1949年：青龍窟が国天然記念物に仮指定
		近代・中世	1919年：『京都府誌』に窟神社の記載あり 青龍窟が普智山等覚寺の奥の院とされる
	更新世	後期	1万1700年前 40万～2万年前：ナウマンゾウ生息 9万年前：阿蘇4火砕流が青龍窟に流入
		中期	12万6000年前 最終間氷期最盛期(MIS-5e)
		前期	60万～40万年前：トウヨウゾウ生息 77万年前
	新第三紀	新第三紀	258万年前 1500万年前：日本海形成。平尾台が大陸から現在の位置に移動
		古第三紀	6600万年前
	中生代	白亜紀	1億年前：マグマの貫入によって平尾石灰岩が大理石化 花崗閃緑岩、アプライト(鬼の唐手岩)形成
		ジュラ紀	
		三畳紀	
古生代	ペルム紀	2億5200万年前	
	石炭紀	2億5500万年前：平尾海山がパンゲア大陸に合体 3億4000万年前：平尾石灰岩が海山(海底火山)上の生物礁として誕生	

2. 青龍窟のなりたち

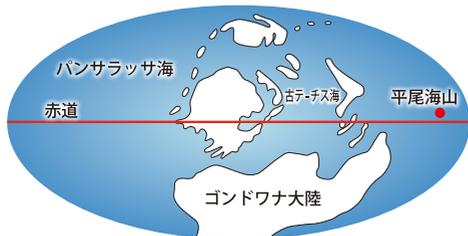
浦田健作

西南日本の平尾台(福岡県)、秋吉台(山口県)、帝釈台(広島県)、阿哲台(岡山県)、青海(新潟県)などの石灰岩地域は、古生代石炭紀前期からペルム紀末期(3億4000万年～2億5500万年前)に、海底火山(海山)上に石灰質生物の殻が堆積した生物礁として形成されたと考えられています。その時代には地球史上で唯一、すべての大陸が集合した超大陸パンゲアが出現しました。平尾台ほかの海山群は、大陸をとりまくパンサラッサ海の赤道付近で誕生し、海洋プレートの移動とともに約8500万年かけて大陸東部に合体しました。移動速度をプレートの平均的な速度の5cm/年とすると、約4300km動いたことになります。

中生代白亜紀中頃(1億年前)になると、地球史上最も火成活動が激しくなり、大量のマグマ(溶けた岩石)の上昇によってパンゲア大陸は分裂して現在の大陸分布の原形ができました。平尾台を含む太平洋周辺においては、地表では火山、地下では花崗岩類が形成されて大陸が成長し、地下にあった平尾石灰岩はマグマの熱によって大理石化しました。

ユーラシア大陸の一部だった北部九州は、新生代古第三紀始新世～

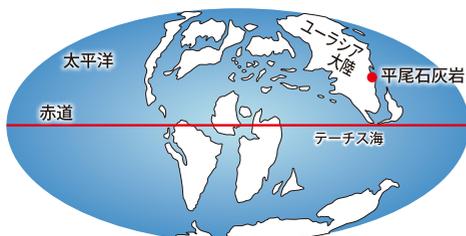
① 古生代石炭紀前期(3億4000万年前)



② 古生代ペルム紀末期(2億5500万年前)



③ 中生代白亜紀中頃(1億年前)



④ 新生代新第三紀(1500万年前)



大陸分布と平尾台の位置

①～③ 朝日新聞出版2014(C.R.Scotese原図)を改変 ④ 日本地質学会編2008を改変

漸新世(4000万～2500万年前)に断層運動が起こり、平尾台周辺では山地と低地が区切られ、沈降した低地には筑豊炭田が発達しました。

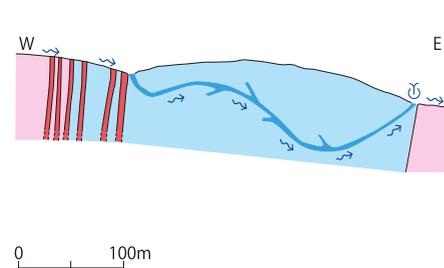
新第三紀中新世(2000万～1500万年前)にはユーラシア大陸東縁でのマグマ活動によって、大陸から日本列島が分離して日本海ができました。このときに西南日本と平尾台も、ほぼ現在の位置に移動しました。

新第三紀後半(数百万年前)の北部九州は侵食作用によって平坦な地形が広がっていました。おそらく、この頃に青龍窟は上下にループした管状水中洞窟として誕生したのでしょうか。

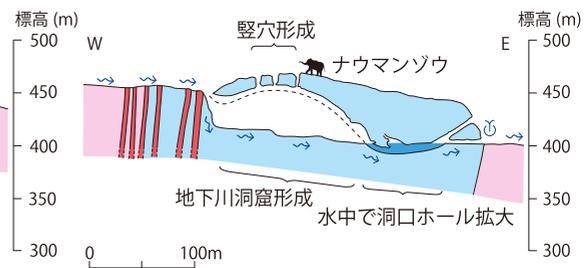
新生代第四紀(258万年前以降)になると平尾台は段階的に隆起し、青龍窟は水中洞窟から地下川洞窟に移行して、高度差50m以上の峡谷通路が形成されました。最後まで水中で拡大を続けた水中洞窟最下部が現在の洞口ホールです。海面が低下した氷河期に大陸から渡ってきたナウマンゾウのような動物が、竪穴から落下して化石になりました。

その後、洞口ホールより上にあった水中洞窟部分は地表侵食によって消失し、土石流や9万年前の阿蘇4火砕流が流入するとともに、天井の崩壊や鍾乳石の形成が重なって、現在は青龍窟の多くの部分は崩壊・埋没していると考えられます。

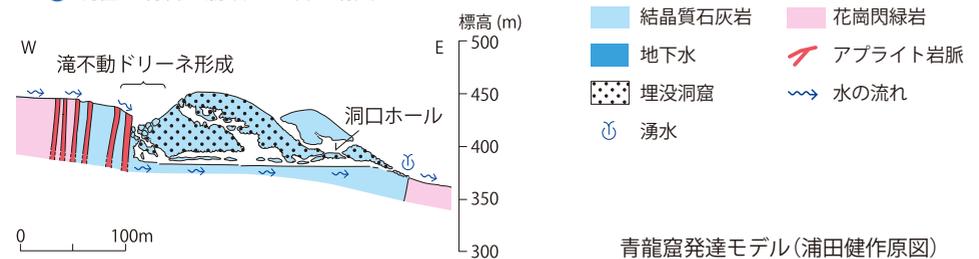
① 数百万年前? 地下水中で管状洞窟形成



② 数十万年前? 地下川洞窟形成



③ 現在 洞窟の崩壊・埋没・消失



青龍窟発達モデル(浦田健作原図)

3. 青龍窟の地質・地形

浦田健作

平尾台の石灰岩(平尾石灰岩層)は二度の変成作用で化石や地質構造が失われて形成過程がよくわからないため、同時代の秋吉石灰岩層と比べて古生代後期(3億4000万~2億5500万年前)に海底火山上で誕生したとされています。プレートの動きで大陸下数十kmの深さに沈みこんだ石灰岩は、強い圧力による変成作用を受けたあとに上昇し、1億年前の中生代白亜紀には地下数kmの深さで高温のマグマの熱変成作用によって結晶の大きな結晶質石灰岩(大理石)に変化しました。

平尾台の北東側では、地下でマグマが冷え固まった花崗閃緑岩中に半島状に突き出すように広谷台の結晶質石灰岩が分布しています。青龍窟は、この広谷台の結晶質石灰岩中にできた石灰岩洞窟(石灰洞・鍾乳洞・カルスト洞窟)です。地表の石灰岩や洞内の地下川では、角砂糖のような大きな方解石結晶ほうかいせきが集まった純白の美しい結晶質石灰岩が見られます。結晶質石灰岩中に入り込んだマグマはアプライトおにからていわという白い板状の花崗岩質岩脈となり、青龍窟の西側にそびえる鬼の唐手岩のほか青龍窟内にも分布します。



アプライト岩脈(鬼の唐手岩)



結晶質石灰岩(地下川)



花崗閃緑岩



方解石結晶が集まった結晶質石灰岩

約9万年前に阿蘇火山が噴火し、平尾台全体が阿蘇4火砕流に覆われました。青龍窟にも流入した火山灰が堆積しています。

石灰岩は川や雨の酸性の水に溶けやすい性質があるため、平尾台のような石灰岩地域では地表に川や谷ができず、石灰岩が溶けてできた洞窟の中を川が流れます。これがカルスト地形です。青龍窟は、西側にある貫山ぬきさんから広谷にかけての花崗閃緑岩地域から湧き出した川が、広谷台の結晶質石灰岩中に流れ込んでできたカルスト地下水系の一部です。東洞口の東側で結晶質石灰岩から花崗閃緑岩に変わると、地下水は地下を流れることができなくなり、湧きだして地表の弁入川べんにゅうとなって、やがて白川しらかわから小波瀬川おぼせに合流して瀬戸内海の周防灘すおうなだに流れ出ます。

現在は水が流れていない洞口ホールは、かつては天井まで水に満たされた水中洞窟だったと考えられます。当時の地下水面を示す水平溝(溶食ノッチ)すいはいこうが壁に多く残っています。地下川洞窟は地下水の侵食によって結晶質石灰岩が溶かされ削られた深い地下の谷を形成しています。



阿蘇4火山灰の火山ガラス(半円形は気泡跡)

撮影：浦田健作・木村颯

*九州大学浅海底フロンティア研究センターの機材を使用



西洞口ホール上部の溶食ノッチ



青龍窟の山並みと白川に合流する弁入川(左)



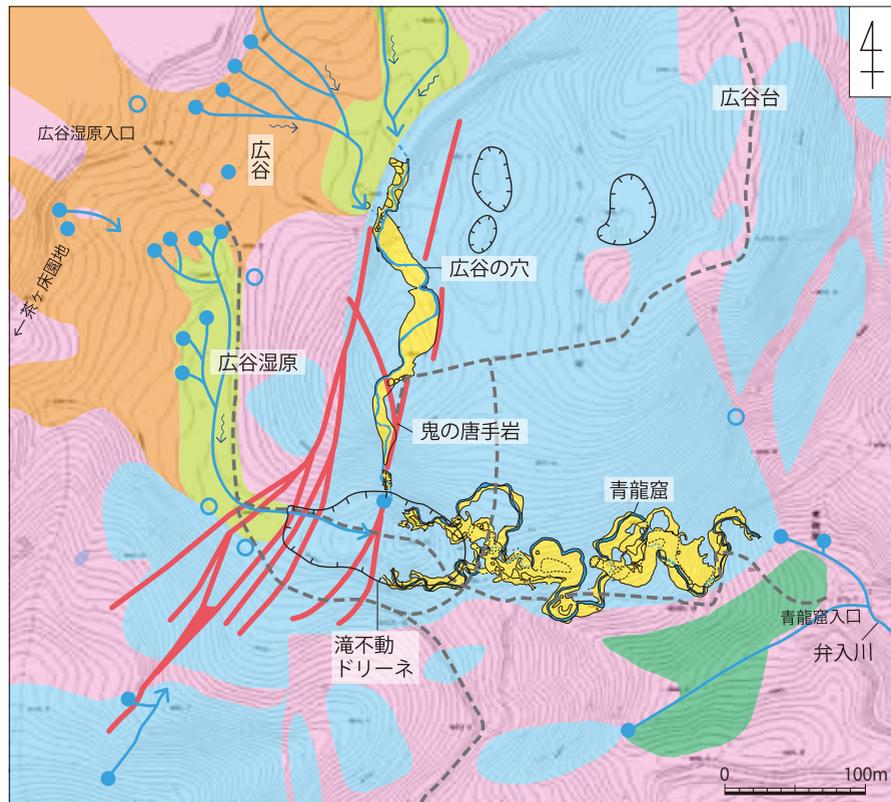
西洞口ホール中段の溶食ノッチ

4. 青龍窟周辺の自然環境

浦田健作

青龍窟の西側には^{ひろたに}広谷と呼ばれる南北1km、東西0.5km、深さ50～150mの谷があります。結晶質石灰岩（大理石）と花崗閃緑岩との境界にできた谷で、北西側は花崗閃緑岩が崩壊して発生した土石流におおわれ、斜面からしみ出した水によって、草原の中にたくさんの湧水湿地が発達しています。南側の広谷湿原は荻田町の天然記念物や環境省の日本の重要湿地に指定されており、ノハナショウブ（環境省・福岡県絶滅危惧種）やオオミズゴケ（環境省・福岡県準絶滅危惧種）などの湿原植物を観察できます。

広谷を流れる小川は石灰岩中に消えるため、広谷は出口のない閉じた谷です。北側の小川は石灰岩の崖下から広谷の穴（鍾乳洞）の中を流れ、鬼の唐手岩の下で流出して滝を作り、滝不動ドリーネの底から再び地下に流入します。南側の広谷湿原の小川は、滝不動ドリーネに向かう階段状の谷の途中で徐々に地下に吸い込まれます。地下に消えた川は青龍窟の奥に現れて、地下川となります。地下でマグマが固結したアプライト岩脈群が南北方向の地下ダムとなって上流側の地下水を堰き止めているため、広谷の穴と広谷湿原が形成されたと考えられます。



- 結晶質石灰岩
- 花崗閃緑岩
- 結晶片岩
- 河川堆積物（谷底平野）
- 土石流堆積物
- アプライト岩脈
- 地下河川（洞窟）
- 地表河川
- 流入口
- 水の流れ
- 湧水
- 増水時湧水
- ドリーネ
- 散策道



広谷湿原と鬼の唐手岩、周防灘を望む



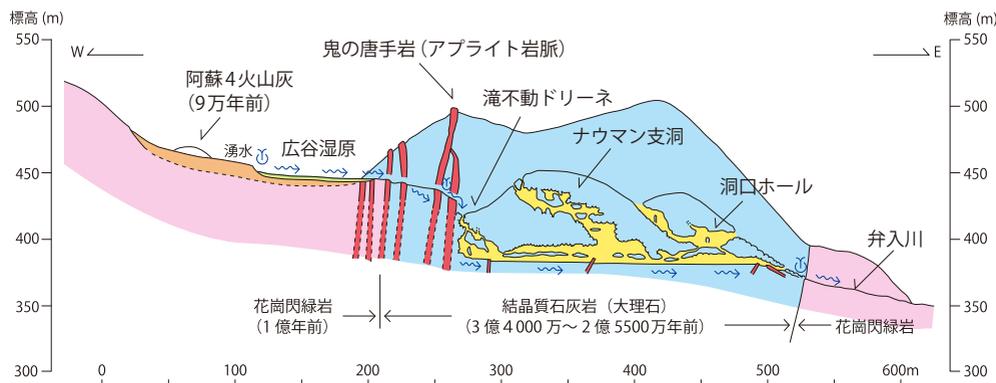
広谷湿原とノハナショウブ



広谷台のカルスト地形



滝不動ドリーネに流れ込む滝



広谷-青龍窟周辺の地質・地形平面図と東西方向断面模式図（浦田健作原図）

5. 青龍窟の鍾乳石

吉村和久

青龍窟の内部は、いろいろな形の鍾乳石により被われています。天井から滴り落ちる地下水から石灰分が固まってできる「つらら石」、床から上に向かって筍状に成長する「石筍」、つらら石と石筍が連結した「石柱」、壁や床をかざる「流れ石」、田の畦状の高まりを作る「畦石」、管状の「鍾乳管」、垂れ幕のような「幕石」、石灰分が白い粘土状になった「ムーンミルク」、石粒を石灰分が取り巻いた「豆石」などがあります。

鍾乳石は1cm成長するのに100年以上かかります。洞口ホールには10万年以上前にできた石筍があるので、その頃すでに空洞が存在していたことが確実です。また、鍾乳石に含まれる成分を調べることで、1000年前に洞窟の上の地表が草原だったことがわかり、松明の煤による黒い縞模様を含む石筍が観察されることから、数百年前には人が利用していたことがわかりました。鍾乳石は過去のいろいろな情報を記録保存したタイムカプセルです。

なお、冬季には洞口ホールの滴下水が凍って「氷つらら石」や「氷筍」などの氷鍾乳石が見られます。平尾台の洞窟では珍しい現象です。



つらら石(スタラクタイト)



つらら石・石柱(コラム)・石筍(スタラグマイト)



石筍破損断面の煤の黒い模様



流れ石(フローストーン)と幕石



鍾乳管(ストロー) 撮影: 青龍クラブ



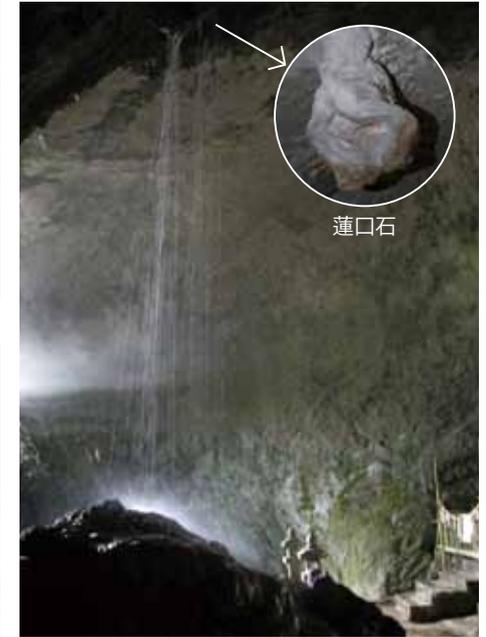
幕石(カーテン) 撮影: 青龍クラブ



豆石(ピソライト) 撮影: 浦田健作



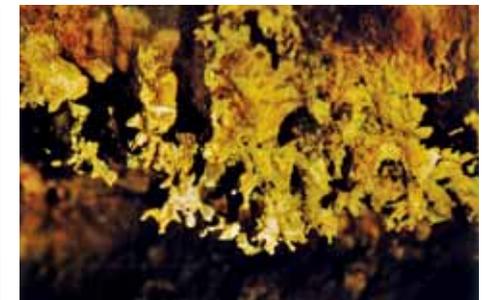
ムーンミルク 撮影: 浦田健作



蓮口石(シャワーヘッド)と石筍



畦石(リムストーン)



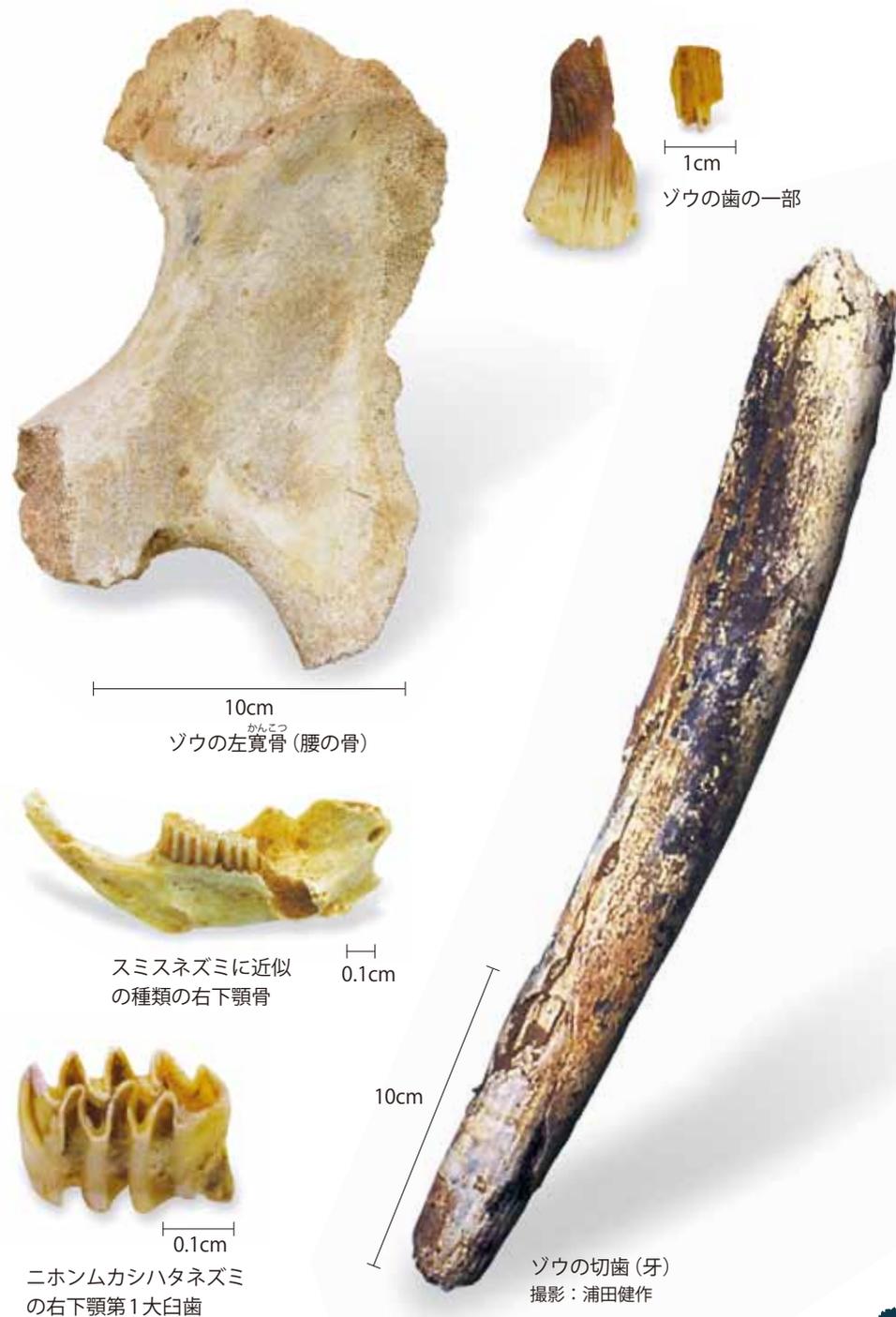
洞窟サンゴ(ケイブコーラル) 撮影: 青龍クラブ

6. 青龍窟の化石

中川 良平

平尾台の洞窟からは、数十万年前から最近のものまで、さまざまな時代の動物の化石や骨が見つかります。青龍窟のナウマン支洞では、絶滅したゾウの一種であるナウマンゾウの赤ちゃんの頭の骨が見つっています。ほかにもネズミの絶滅種や、現在では寒い山岳地帯だけにすむ哺乳類の化石も見つかりました。これらの動物骨は、放射性炭素による年代測定によって、少なくとも4万5000年より古い時代の化石だとわかりました。

ナウマン支洞の別の場所では、ナウマンゾウとは違う種類の絶滅したトウヨウゾウが見つかりました。トウヨウゾウは、約60万～40万年前まで日本に生息したことがわかっています。青龍窟の化石をさらに調査すれば、数万年以前にどんな動物たちがいたか、はっきりわかることでしょう。



7. 青龍窟のコウモリ

松村 澄子

洞窟に住むコウモリは、冬眠時期をのぞいて毎夜出洞し、森や草原、川で虫を食べて明け方に戻ります。超音波でエコーロケーション(反響探知)をおこないながら飛行します。洞窟は風雨を避けられて一年中気温が安定し、光がまったくない暗闇なので、コウモリにとって捕食者がいない優れたねぐらです。また、食物の少ない洞窟ではコウモリのふん(グアノ)は洞窟にすむ生物にとって貴重な栄養源となります。

青龍窟では、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、モモジロコウモリの4種類がみつかっています。このほかに、ホオヒゲコウモリとテングコウモリの骨が確認されています。夏には洞内にばらばらに見られますが、冬には入口に近い寒い場所で冬眠します。

洞窟性コウモリは梅雨の後半に洞窟内で集団出産・保育をおこないますが、平尾台ではそのような集団はみつかりません。青龍窟上層部には古いグアノの山があるので、かつては出産・保育集団や大きな集団がいた可能性があります。



冬眠中のキクガシラコウモリ

*冬季には洞口近くで冬眠中のコウモリを見ることができますが、触れたり光を当てたり、そばで大声で話すなどの冬眠を妨げる行為は控えて下さい。

キクガシラコウモリ

最も多く見られる中型の種類で、体重16～25g。毛色は茶、コウモリ傘のように2本足で逆にぶら下がり(ペンダント型)、鼻の周りに馬蹄型の皮膚飾りがあるのが特徴。夏季には洞窟内のあちこちに見られるが、冬季には洞口に近い寒い天井や壁で冬眠する。(13頁写真)



コキクガシラコウモリ

キクガシラコウモリにそっくりだが、はるかに小型で体重は5～6g。青龍窟では冬季に上層部で200頭の集団が見られる。キクガシラコウモリよりも刺激に敏感で、冬眠中にもしばしば目覚めて活動する。(福岡県準絶滅危惧種)



撮影：浦田健作

ユビナガコウモリ

黒灰色の毛色で体重10～17gの中型コウモリ。翼が細く長く、また斜めに他個体や壁に張り付くのが特徴。青龍窟では2015年の夏に洞口で100頭の集団が発見されたが、本種の特徴として、毎年同じ場所に見られるというわけではない。(福岡県準絶滅危惧種)



モモジロコウモリ

黒灰色の毛色で体重5～10g。ユビナガコウモリに似るが翼がユビナガコウモリほど長くはなく、足が大きいのが特徴。股間の毛が白いのでモモジロという。青龍窟では夏季・冬季ともに洞口近くで見られる。狭いすきまを好んでもぐりこむ。(福岡県準絶滅危惧種)



*コウモリ捕獲資格を持つ専門家による調査の様子 撮影：浦田健作

8. 青龍窟の歴史

若松 善満

青龍窟では、旧石器時代に相当する約4万5000年以前のナウマンゾウなどの化石が発見されていますが、その当時の人類の痕跡である遺構・遺物は未確認です。現在、確認されている青龍窟の歴史は、山岳修験道等覚寺の行場あるいは奥の院などの宗教行事の場として機能した中世にさかのぼります。現在においても、国指定重要無形民俗文化財「等覚寺の松会」の行事がおこなわれています。青龍窟東洞口ホールには、窟神社が所在し、石造物なども残り、信仰の対象となっています。発掘調査では、中世の地蔵菩薩坐像などの遺物が出土しており、宗教行事に関する祭壇や灯明石が確認されています。近世の『天保国絵図豊前国』には、「青龍窟」が描かれ、洞口ホールでは、近世・幕末に流通した寛永通寶が確認されています。

大正時代から鉄道による交通整備に合わせて沿線の観光開発もおこなわれるようになり、昭和2年(1927)には、「大正広重」と呼ばれた吉田

初三郎はつさぶろうによる『日本鳥瞰九州大図絵』にほんちようかんきゅうしゅうだいずえにも青龍窟が描かれています。昭和24年(1949)に、青龍窟は国の天然記念物として仮指定がおこなわれたことにより、さらに観光名所として注目されるようになりました。昭和31年(1956)頃、青龍窟を観光案内することを目的とし、青龍窟東洞口の入口には、案内所が建てられ、ランプや草履などの貸出がおこなわれていました。また、昭和33年(1958)に福岡県若松市(現在の北九州市若松区)出身の芥川賞作家である火野葦平ひのあしへいが発表した小説『日本八景』にほんはっけいでは、青龍窟の洞内が描かれています。

昭和30年代(1960)頃から洞窟探検が日本で盛んになり、昭和36年(1961)に青龍窟地下川の測図が初めて作成され、昭和50年(1975)には白龍窟が、昭和51年(1976)にはナウマン支洞・ナウマンゾウ化石が発見されました。今後も、調査の進展によって、新たな支洞や化石、遺構・遺物が確認される可能性があります。



動物化石



『天保国絵図豊前国』(国立公文書館所蔵)



『日本鳥瞰九州大図絵』(国際日本文化研究センター所蔵)



地蔵菩薩坐像



昭和31年頃に青龍窟東洞口入口に建てられた案内所(鹿島1995)



等覚寺の松会「幣切り」

9. 青龍窟における苅田町の取り組み

若松 善満

青龍窟は、昭和37年(1962)に文化財保護法で「学術上貴重でわが国の自然を記念するもの」として国の天然記念物に指定されました。

平成4年(1992)頃に青龍窟を含む北九州国定公園平尾台における車両進入による環境汚染・破壊の問題が起きました。苅田町教育委員会は、青龍窟の環境保全のために、平成5～7年(1993～95)に、国・県の指導を受け、青龍窟を中心とした等覚寺修験道遺跡群の調査を考古学・民俗学・自然科学などの観点から多角的におこない、平成8年(1996)には、その調査概報を刊行しました。

平成12年(2000)に青龍窟の調査成果を町民に還元することを目的とし、苅田町の共催で第26回日本洞窟学会の大会として「カルスト・フェスティバル2000苅田」がおこなわれました。国内外から多くの洞窟研究者が集まり、学術発表やシンポジウムが開催されるなか、町民を対象とした洞窟探検などのイベントもおこないました。町民が青龍窟の魅力に

触れ、郷土愛を育むきっかけとなりました。近年では、ケイビング愛好家や研究者に加えて、一般の観光客による利用も増加したことから洞窟内における事故が発生しています。その再発防止や利用者の安全確保のために、苅田町消防本部と苅田町教育委員会は、青龍窟における洞窟救助訓練をおこなっています。

平成28年(2016)には、苅田町で2回目となる日本洞窟学会第42回大会(苅田町平尾台大会)がおこなわれ、苅田町歴史資料館では「青龍窟と世界の洞窟写真展」を開催しました。また、研究者による学術講演会・公開講演会だけでなく、前回の学会に参加した町民や洞窟学会員による青龍窟探検・コウモリ観察会・ガイド養成講座が実施され、青龍窟の環境保全や活用に関する人々の育成が進みました。

今後も、この貴重な青龍窟を次世代に確実に継承するために、町と町民は協働して、青龍窟の環境保全や活用を続けていきます。



等覚寺修験道遺跡群の調査



カルスト・フェスティバル2000苅田



日本洞窟学会第42回大会



コウモリ観察会 撮影：日本洞窟学会



救助訓練



体験学習(西部公民館講座)



青龍窟と世界の洞窟写真展



夏休み青龍窟探検(まちの歴史講座)

1) 青龍窟における規制について

青龍窟は北九州国定公園第一種特別地域に所在し、国の天然記念物に指定されています。そのため、自然公園法・文化財保護法の規制があります。また、青龍窟は窟神社の境内地であるため、行為によっては所有者の承諾が必要になります。ルールを守って、将来に渡っての青龍窟の環境保全に、ご協力をお願いします。以下に規制されている内容の一部を列記します。

自然公園法

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ■ 工作物の新築、改築、増築 | ■ 木竹の伐採 |
| ■ 指定区域での木竹の損傷 | ■ 鉱物や土石の採取 |
| ■ 河川、湖沼等の水位・水量を増減させる行為 | ■ 指定湖沼への汚水の排出等 |
| ■ 広告物の設置・表示 | ■ 屋外での土石及び指定物の集積・貯蔵 |
| ■ 水面の埋立等 | ■ 土地の形状変更 |
| ■ 指定植物の採取等 | ■ 指定区域での指定植物の植栽・播種 |
| ■ 指定動物の捕獲等 | ■ 指定区域での指定動物の放出 |
| ■ 屋根、壁面等の色彩の変更 | ■ 指定する区域への立入り |
| ■ 指定区域での馬車等の乗り入れ | ■ 政令で定める行為 |

※詳しくは福岡県京築保健福祉環境事務所へお問い合わせ下さい。

文化財保護法

現状を変更する行為。

例)

- 看板など工作物・建造物を設置したり壊したりすること
- 鍾乳石を折ったり、岩石、化石などを壊したりすること
- 鍾乳石、岩石、化石、遺物などを持って帰ること
(化石・遺物を発見した際はそのままにしておき、洞窟管理委員会に連絡して下さい。)
- 落書き(傷つけ、スプレー、ペンキなど)
- 地形を損う行為
- 景観などに影響を及ぼす行為

※詳しくは洞窟管理委員会へお問い合わせ下さい。

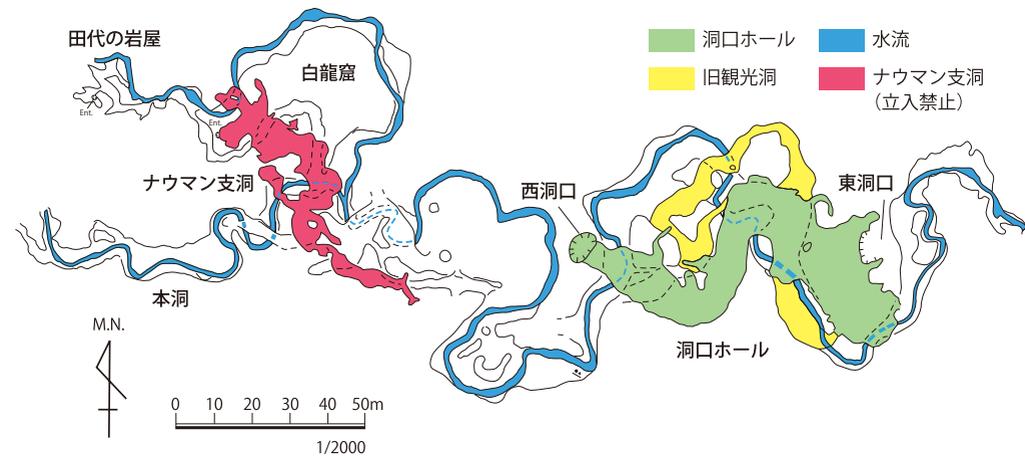


2) 青龍窟入洞について

青龍窟は、洞口ホールと地下川(本洞、^{はくりゆうくつ}白龍窟、田代の岩屋、ナウマン支洞)に大きく分けられます。昭和30年代には一部が観光洞として公開されていました。窟神社の祭壇がある洞口ホールは、今でも信仰の対象となっていて、一般観光では、この洞口ホールまでは自由に入ることができます。照明などの灯りはなくて外からの太陽光だけで薄暗いので注意が必要です。洞口ホール以外の洞内は明りが全くない暗闇の世界で、複雑な迷路構造のため極めて危険ですので、洞窟探検の専門家やガイド・熟練者の同行以外での入洞は控えて下さい。

また、洞口ホール以外への入洞の際は洞窟管理委員会・洞窟管理本部と平尾台自然観察センターへ事前に届出をお願いします(21頁参照)。しっかりした計画を立てて、安全第一に行動していただきますようお願いします。また、ナウマン支洞は化石の保護のため立ち入りは禁止です。

持ち込んだものは必ず持ち出し洞内のものは持ち出さない、泥で汚れた手で壁や鍾乳石を触らない、傷つけない、トイレは入洞前にすます、などのマナーを守って洞内を自然のままの状態に保つよう心がけて下さい。



青龍窟平面図(浦田健作編集)

3) 青龍窟入洞の届出について

青龍窟において洞口ホール以外の洞内へ入る場合は、苅田町教育委員会・苅田町消防本部と平尾台自然観察センターへ事前に届出をお願いします。苅田町教育委員会・苅田町消防本部への届出は22頁の様式「青龍窟入洞届」に記入して提出して下さい。「青龍窟入洞届」は苅田町ホームページよりダウンロードするか、22頁をA4へ拡大コピーしてご使用下さい。「青龍窟入洞届」は遅くとも入洞予定日の3日前(土日祝祭日を含まない)までに下記の届出先へFAXまたは郵送で提出をお願いします。

■ 記入要領

- 届出者：入洞届の提出をおこない、内容確認などの連絡が取れる人
- 責任者：入洞の責任者の氏名、電話番号(届出者と同じ場合は空欄で可)
- 入洞目的：青龍窟に入洞する目的
- 入洞日時：入洞日と入洞予定時間。複数日の場合は全て記入
- 入洞場所：入洞口・出洞口など、入洞するルートの概要
- 入洞予定人員：入洞する人数
- 待機連絡先：当日に緊急事態が発生した場合の待機対応者の氏名、電話番号

*届出は文化財の適正な利用を促すことを目的とし、入洞の安全を保証するものではありません。各自の技量・体力を十分に把握し、無理のない計画を立てて下さい。

*記載内容は変更になる場合がありますので、最新情報は苅田町ホームページをご参照下さい。

■ 届出先

名称	住所	連絡先	
苅田町教育委員会 生涯学習課 まちの歴史担当	〒800-0392 福岡県京都郡苅田町富久町1-19-1	TEL	093-434-2212
		FAX	093-434-5543
苅田町消防本部	〒800-0351 福岡県京都郡苅田町京町2丁目4-4	TEL	093-434-0119
		FAX	093-434-5236
平尾台 自然観察センター	〒803-0180 福岡県北九州市小倉南区平尾台一丁目 4番40号	TEL	093-453-3737
		FAX	093-452-3739
		E-mail	hiraodai@cronos.ocn.ne.jp

*平尾台自然観察センターへの届出については平尾台自然観察センターホームページをご参照下さい。

*入洞において生じた事故及び損傷事項は利用者の責任とし、届出先はその責任を負いません。

苅田町教育委員会様
苅田町消防本部様

青龍窟入洞届

下記のとおり国指定天然記念物青龍窟へ入洞しますので届出致します。
入洞の際には注意事項を遵守し、安全第一に行動を行うとともに、洞内環境保全に努めます。

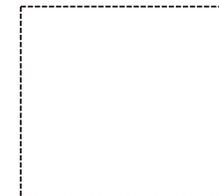
年 月 日 届出者 氏名
(所属団体名)
住所
電話
責任者 氏名
電話

入洞目的	
入洞日時 (入洞日・入洞時刻)	
入洞場所 (入洞口・洞内ルート)	
入洞予定 人員	
待機(緊急時)連絡先 (氏名、電話)	

<注意事項>

1. 記入欄は漏れなく記入して下さい。
2. 国指定天然記念物青龍窟に入洞するにあたり以下の事項を遵守して下さい。
 - 1) 現状は一切変更しないこと。
 - 2) 工作物・建造物、又は備品を汚染・破壊しないこと。
 - 3) 木竹の伐採、又は岩石、生物(植物、動物など)を採取しないこと。
 - 4) 植栽、その他土地の形質を変更しないこと。
 - 5) 利用に際しては、常に公衆道徳を重んじ、環境を汚さないこと。
 - 6) 骨化石や遺物を採取しないこと。(発見した場合はそのままにして苅田町教育委員会へ連絡すること)
 - 7) ナウマン支洞は化石の保護のため立ち入りしてはならない。
 - 8) 入洞において生じた事故及び損傷事項は利用者の責任とし、町はその責任を負わない。
3. 届出は文化財の適正な利用を促すことを目的とし、入洞の安全を保証するものではありません。
4. 非常時の場合、入洞者全員の名簿(氏名、生年月日、住所、電話番号)の提出をお願いする場合があります。

受付印



7 西洞口

11. 青龍窟洞口ホール

松本 高志

洞口ホールは東洞口から西洞口へS字に蛇行した長さ130m・高度差35mのU字型貫通空間で、その内部は東洞口ホール、中間通路、西洞口ホールに分けられます。洞口ホール全体が窟神社の境内地です。

自然光がさしこむ部分 暗い部分



5m

6 中間通路

西洞口ホール

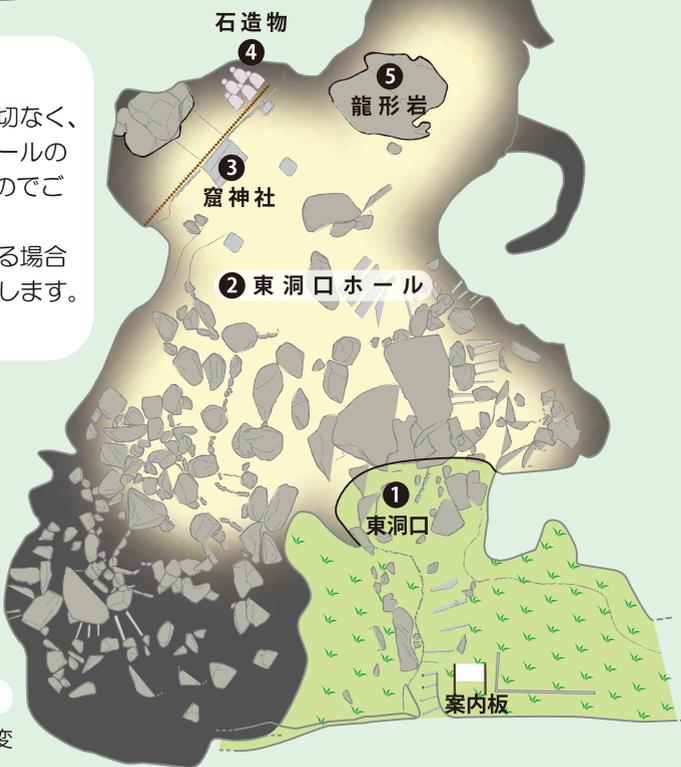
注意

★洞内には照明など灯りは一切なく、自然光が差し込む東洞口ホールの窟神社周辺以外は暗闇ですのでご注意ください。

★洞口ホール以外に入洞される場合は、入洞届の提出をお願いします。(21頁参照)



平面図



案内板



1 東洞口入口

青龍窟の東洞口は平尾台の北東部広谷台の南東斜面標高約 400mの位置に東向きに開口しています。



2 東洞口ホール

東洞口ホールは長さ約 60m、最大幅約 20m、最大天井高約 15m のドーム状の空洞で平尾台の洞窟では最大規模の広さを誇ります。



3 窟神社

青龍窟には、かつての山岳修験道等覚寺の行場や奥の院があったとされています。現在は窟神社があり、「等覚寺の松会」(国指定重要無形民俗文化財)の行事がおこなわれています。



4 石造物

等覚寺奥の院の青龍窟内には、石造物が多く見られます。



5 龍形岩

龍形岩は直径約 5m、高さ約 2m で、青龍窟で最大の石筍鍾乳石です。豊玉姫が神になったときの抜け殻だという伝説があります。(福岡県総務部 1976)



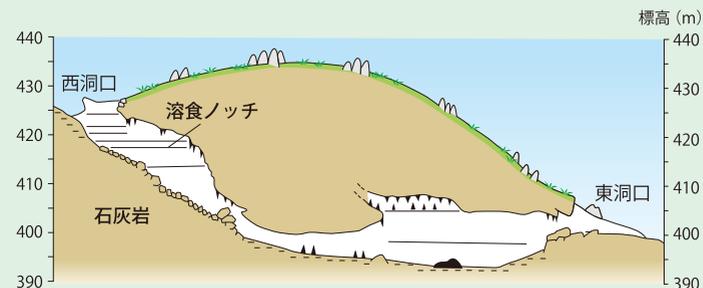
6 中間通路

東洞口と西洞口をつなぐ中間通路の断面は半楕円形管状になっており、火山灰や砂泥で段丘が形成されています。



7 西洞口

西洞口は標高 425m に位置し、竪穴状に開口しています。壁面には地下水面付近でできた溶食ノッチ(水平溝)が多く見られ、かつて洞口ホールが水中洞窟であった形跡を残します。



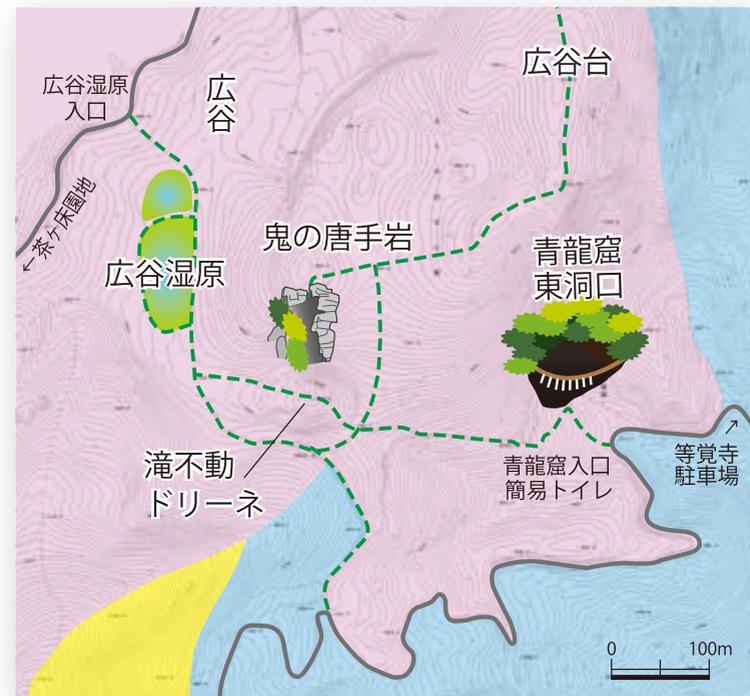
断面模式図

地下水面が段階的に下がることで天井や壁にノッチが形成されました。ノッチの高さに地下水面が滞っていたときには、それよりも低い部分は水中洞窟でした。かつて東洞口は西洞口と同じ高さまで洞窟が続いていたと考えられます。

12. 青龍窟へのアクセス



- ・東九州自動車道苅田北九州空港ICより等覚寺駐車場まで車で約35分、駐車場から徒歩で約40分
- ・東九州自動車道行橋ICより等覚寺駐車場まで車で約25分、駐車場から徒歩で約40分
- ・平尾台茶ヶ床園地より広谷湿原を経て徒歩約40分



青龍窟周辺の指定区域図

- 北九州国定公園 第1種特別地域
- 北九州国定公園 第3種特別地域
- 筑豊県立自然公園

■ 執筆・編集 (50音順 敬称略)

監修・執筆者 浦田健作 (大阪経済法科大学客員教授、苅田町文化財保護審議会委員)
 執筆者 中川良平 (三重県総合博物館学芸員) 松村澄子 (元山口大学准教授)
 松本高志 (苅田町教育委員会) 吉村和久 (九州大学名誉教授)
 若松善満 (苅田町教育委員会)

デザイン 河口尚子 (苅田町教育委員会)
 編集 苅田町教育委員会

■ 協力機関 (50音順)

カマネコ探検隊 苅田町消防本部 九州国際大学付属高等学校生物部 九州大学浅海底フロンティア研究センター
 九州歴史資料館 国立公文書館 青龍クラブ 日本洞窟学会 平尾台自然観察センター 平尾台自然の郷

■ 掲載写真 記載のない写真は苅田町教育委員会所蔵

■ 引用文献

朝日新聞出版2014『週刊 地球46億年の旅』
 鹿島彦彦1995『すねぐろの洞窟行脚』
 苅田町教育委員会1996『等覚寺修験道遺跡群調査概報-福岡県京都郡苅田町等覚寺所在遺跡群の調査報告-』苅田町文化財調査報告書第27集
 日本地質学会編2008『日本地方地質誌3 関東地方』朝倉書店
 福岡県総務部広報室1976『郷土のものがたり 第二集』